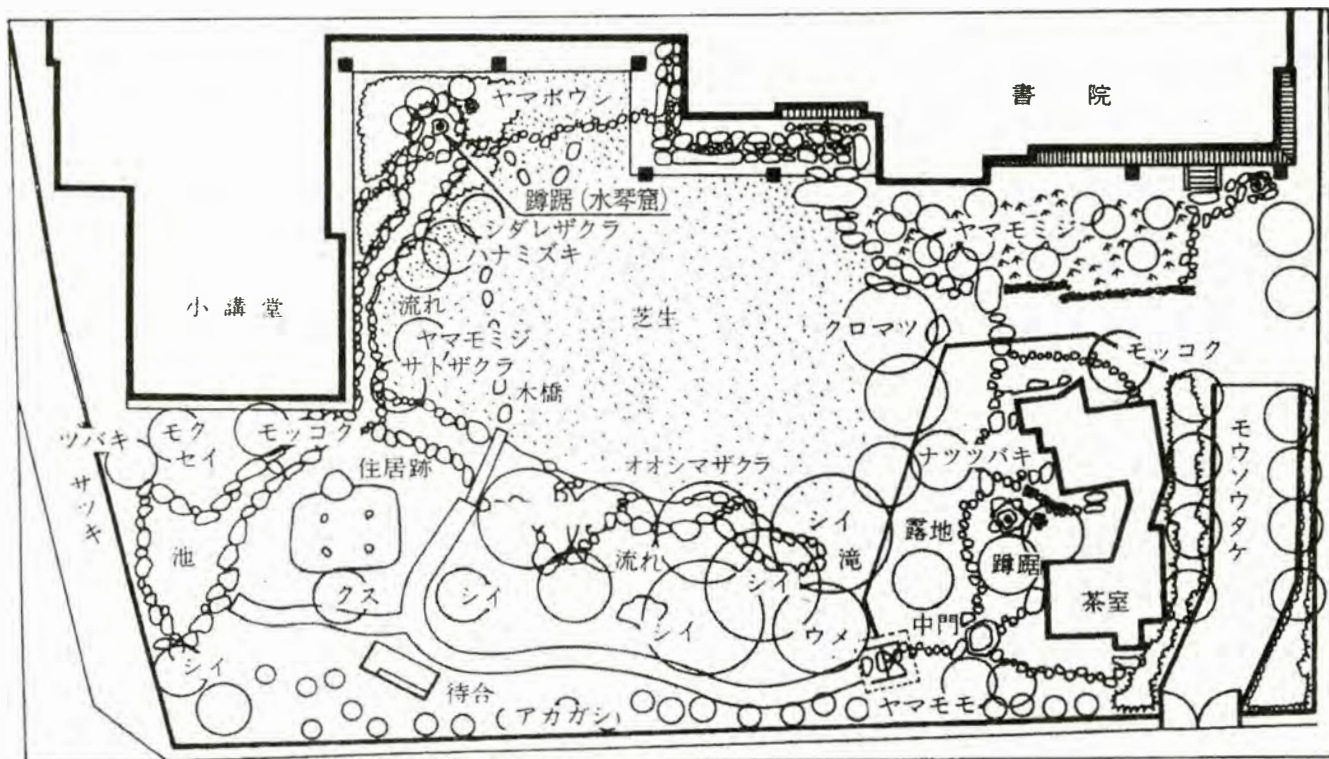


— 歷史館庭園 —



▲茶室“松滴庵”

▼庭園の樹木



江戸の風雅“^{すいきんくつ}水琴窟の水音”

古来、日本には遠方からの梵鐘の余韻を楽しんだり、松風の音に喜んだりするようなわずかな反響や余韻を

純粹に鑑賞しようとする嗜好があり、人々は極めて繊細な感覚をもっていた。この風雅な感覚が水琴窟を造らせたものであろう。

水琴窟は庭の手水鉢や蹲踞などの近くに小さな洞窟を造り、そのなかに水滴を落として、水音を洞窟の壁面に反響させ、地上に漏れてくる幽かな響きを楽しむ装置である。日本庭園の趣をより高めようとする技法であり造園技術の最高傑作の一つと言えよう。

水琴窟が庭園を構成する技法として用いられたのは、江戸時代のことだといわれている。江戸時代中期の作庭で、国の名勝に指定されている鳥取県東伯郡羽合町の尾崎氏庭園には、縁先の手水鉢の前に現存している。明治時代になって盛んに取り入れられたようであるが、漸次衰退の一途をたどり、現在では、全国でも残存しているものは数少ない。

ここ品川歴史館の庭園内には、その水琴窟がある。上のほうから見ると蹲踞の下に水門の小さな穴(窟口)とそのまわりに小石が敷いてあるだけで中はわからない。蹲踞から出た水のうち、その大部分は、流れの方にゆくが、わずかな量の水が水門の方にゆくように作られていて、この水門から地下に設けられた小さな洞穴に滴り落ちる。そこで発生する幽玄な音は、今でも聞くことができる。しかしながら、江戸時代の風雅な人々が楽しんだ水滴音は、現在車の騒音によってうちけされがちである。このため、いつでもこの音を聞くことができ、構造を知る事ができるよう録音テープを内蔵した模型を館内に設置している。

***水琴窟の音について** 窟口における音響レベルの最高値は、平均で 62dB(A特性)、時に 68dBに達する。(小さな空洞による反響音であるためか、発生音量は小さく、遠方までは届かない。) また、その周波数特性は、中心周波数が 0.5KHZ域では 30dB以下、

KHZ間に頂点をもった高音域の音であることがわかる。自然界の水の動きの多くは、例えば、落水音などは周波数特性が平坦なホワイト・ノイズであって、この点からも水琴窟の滴水音は明らかに異なった特徴ある音響である。

—昭和56年6月 旧吉田記念館庭園内の水琴窟現況調査報告書より



◀ 蹲踞の下の水琴窟

▼ 水琴窟の構造

